

第3章 具体的な問い—解説 案（たたき台）

1 敬語の前提に関連する問い…第1章の記述との関連を持たせる

【問1】敬語は、どうして必要なのだろうか。敬語は、人間を上下に位置付けようとするものであり、現代の平等な社会においては、そうした観点でとらえるのは良くないように思う。どう考えれば良いのだろうか。

【解説】敬語の持つ意味は時代によって変わっている。敬語が人間の上下関係を表すことと密接な関連のある時代もあったが、現代社会において、敬語を使うということは、上下関係の意識からというよりも、その人を尊重しようとする、その人に対する敬意を表そうとすること、その人の立場に配慮すること、その人との親疎の距離間を示そうとすることなどの意識に基づいていると言えよう。

すべての人は基本的に平等な関係にある。だからこそ、お互いに尊重し合う気持ちを持って接することが求められているのである。その気持ちこそが敬意であり、その気持ちを表すために敬語が必要だと言えるのではないだろうか。

敬語は使わなければならないものだ、と考えるのではなく、どのような人に対して、どのようなときに、どのような気持ちで敬語を使えばよいのかをよく考えながら、自らが敬語を使うこと、あるいは使わないことを選ぶという姿勢が必要なのである。

【問2】敬語を使うと、自分の素直な気持ちが表せないで、自分らしさを表現するためには敬語を使わない方が良いと感じてしまう。また、相手との関係がよそよそしく感じられてしまい、敬語が心の交流の妨げになっているような気がしてならない。敬語を使わないと、社会生活はうまく行かないのだろうか。

【解説】社会生活において、常に敬語が必要になるわけではない。相手や状況によって、自分らしさを表現するために、また、心の交流が必要なときに敬語を使わない方が良いと感じるのであれば、敬語を使う必要はないだろう。

ただし、相手や状況によっては、敬語を使わないことで、敬語の持つ尊重する気持ちが十分に伝わらない場合もあり、そのために相手や周りの人々に不愉快な思いをさせてしまうこともある。

敬語を使っても、使わなくても、自分の素直な気持ちを表すこと、自分らしさを表現すること、心の交流をすることは可能である。そうした点をよく考える必要があると言えるのではないだろうか。

【問3】尊敬している人には敬語を使って話したいのだが、尊敬していない人にまで敬語を使いたくない。社会人は、とにかく敬語を使っておけばよいという考え方もあるのかもしれないが、自分の気持ちは大事にしたい。どうすれば良いのだろうか。

【解説】この問いは、尊敬していない人に敬語は使いたくない、ということだが、これは、敬語は尊敬している人に用いる言葉だという考え方に基づいている。

しかし、敬語は、尊敬している人に対してだけ使う言葉なのだろうか。基本的に、気持ちと言葉とは連動している。その意味で、尊敬の気持ちと敬語とは連動していると言える。ただし、気持ちと言葉とは常に連動しているわけではない。尊敬していない人や軽蔑している人に対しても、敬語を使うことはあり得る。その意味では、尊敬の気持ちがあるから敬語を使うとは言えないわけである。

ここで確認しておきたいことは、尊敬の気持ちと敬語との関係である。敬語は、敬意に基づき選択される言葉であるが、敬意は必ずしも尊敬の気持ちだけではない。その人の社会的な立場を尊重することも敬意の現れの一つである。仮に尊敬できない人であっても、その人の立場、存在を認めることが敬意につながり、その気持ちを敬語で表すことはできるのである。それは、自分の気持ちを偽っていることになるとは言えない。その意味で、敬語は社会生活の中では必要なものであると言える。

逆に、敬語を使わないことによって自分の率直な気持ちを表そうとすることは、むしろ、社会人として、相手に礼を失したことになると言えるだろう。敬語を使うことは、社会人としての常識を持った自分自身を表現するという役割を果たすのである。自分自身の尊厳のためにも敬語は使われていると言えよう。

【問4】良いと思って買ったものなのに「つまらないものですが」と前置きすることや、自信を持って書いた原稿まで「拙稿」と表すことなどは、何か自分を卑下したような言い方に感じてしまう。こうした表現については、どう考えれば良いのだろうか。

【解説】このような言い方は伝統的に使われているものであり、自分を卑下しているというよりも、自分にかかわるものを小さく表すことによって、相手に対する配慮を示す意識で使われているものだと考えられる。こうした表現の形が自分の気持ちに合っていると思うなら使えばよいし、合わないと感じるのであれば必ずしも使う必要はないだろう。

ほかに、「お口に合うかどうかわかりませんが、どうぞ」といった表現は、「おいしくないのに勧める」ということではなく、自分の判断を押し付けないという意味で相手に対する配慮を示したものである。もちろん、「すごくおいしいから、どうぞ」というように、自分の判断を率直に表すことで相手に対する配慮を示そうとする表現もある。相手や状況に応じて、自分の気持ちに合った表現を選べば良いのである。

2 敬語に関連する問い

【問8】受付の人に、「あちらで伺ってください。」と言われたが、何だか変な敬語だと思った。どういう言い方が良いのだろうか。

【問9】「課長、これは山田様にお届けしますか。」と尋ねたところ、「うん、よろしく頼むよ。」と言われてしまった。私は自分が届けるつもりではなく、上司が届けるかどうかを尋ねただけなのだが、どう言えば良かったのだろうか。

【問10】「お知らせ」として配布された文書に、「来週の日曜日に消防設備等の点検に伺いますが、御在宅する必要はありません。」と書いてあった。表現がどうも気になるのだが、何が問題なのだろうか。

【解説】…第2章の記述との関連を持たせる。

【問8】～【問10】は、いずれも、「あなた（彼・彼女）」の動作について、本来「わたし（あるいはわたし側の人物）」の動作に用いる敬語を用いてしまったという問題である。

【問8】「うかがう」という敬語は、「わたし」が、「あなた」や「彼・彼女」に、〈聞く・尋ねる・訪ねる〉ときに用いる敬語である。この場合は、「あなた」が、〈聞く・尋ねる〉という意味になるので、そのときには「お聞きになる・お尋ねになる」という敬語を用いて、「お聞きになってください・お尋ねになってください」、あるいは、「お～ください」という敬語形式を用いて、「お聞きください・お尋ねください」とすれば良い。

【問9】「お届けする」という敬語は、「わたし」が、「あなた」や「彼・彼女」に、〈届ける〉ときに用いる敬語である。したがって、「お届けしますか」は、「わたし」が、「山田様」に、届けるということになり、「課長」が、「山田様」に、届けるということとは表せない。「課長」が、「山田様」に、届けることを表したいときには、「お届けになる」という敬語を用いて、「お届けになりますか」とすれば良い。

【問10】「御在宅する」という言葉は、「お客様」が、「在宅する」を敬語にしようとしたものだろうが、そもそも「御在宅する」という敬語の形は存在しない。その場合には、「御在宅なさる」あるいは「御在宅」という敬語にして、「御在宅なさる必要はありません」あるいは「御在宅の必要はありません」とすれば良い。

3 敬語を用いたコミュニケーションに関連する問い

【問23】面接試験のときには、「お父さん・お母さん」ではなく「父・母」と呼ぶようにしているが、同居はしていない「おじいさん・おばあさん」について言及するときには「おじいさん・おばあさん」と言っても良いのだろうか。

【解説1】改まった面接場面では、特に「話し手」が子供ではない場合には、自分のおじいさん、おばあさんについて言及するときには、同居していても、いなくても、「祖父」「祖母」と言った方が良い。

【解説2】ふだんは、「お父さん・お母さん・おじいさん・おばあさん・伯父（叔父）さん・伯母（叔母）さん・お兄さん・お姉さん」などと話し掛けている相手を、ウチ扱いの「第三者」とする場合には、「父・母・祖父・祖母・伯父（叔父）・伯母（叔母）・兄・姉」と言うことになる。ただし、日常の余り改まった場面でないときには、「お父さん・お母さん・父親・母親…」などと呼ぶこともある。

【問24】社内の忘年会で司会をすることになった。最初に、社長からのあいさつがあるのだが、そのとき、「社長からごあいさつをいただきます。」と「社長からごあいさつがございませう。」のどちらを言えば良いのだろうか。また、社外の人が多い会場で司会をすることになった。最初に、社長からのあいさつがあるのだが、そのとき、「社長からごあいさつをいただきます。」と「社長からごあいさつを申し上げます。」のどちらを言えば良いのだろうか。

【解説】社内の場合は、「ウチ・ソト」の関係ではないので、社長を高めてもかまわない。したがって、「社長からごあいさつをいただきます。」で良いことになる。

社外の人が多くいる場合には、「ウチ・ソト」の関係が生じるので、「ウチ」の社長を高めない方が良い。したがって、「社長からごあいさつを申し上げます。」が良いことになる。

【問 25】自分が日常は敬語を使って話している田中部長のことを、取引先の社員に話すときにウチ扱いにすることは分かるのだが、「田中」と呼び捨てにするのはどうも抵抗がある。特に田中部長が同席しているときに、「田中」とは言いにくいのだが、どう言えば良いのだろうか。

【解説 1】「第三者」としての「田中部長」をウチ扱いにする（自分側の人物として扱う）ときには、「田中」と呼ぶことに問題はない。これは、飽くまでも、「ウチ・ソト」の関係における表現であって、呼び捨てとは異なるものである。ただし、「田中」とは呼びにくい場合には、「部長の田中」というように、「部長」を職階として示した上でウチ扱いにして呼ぶことがある。

【解説 2】改まった場面では「弊社の部長」、ややくだけた場面では「ウチの部長」などと言うことで、「田中」という名前に触れずに表現することができる。その場合の「部長」は、「田中部長」という敬称としての用法とは異なり、単に職階を示していると考えられる。

【問 26】保護者からの電話で、同僚の田中教諭の不在を伝えるときに、「田中先生はいらっしゃいません。」と伝えたが、それで良かったのだろうか。「田中はおりません。」と伝えた方が良かったのだろうか。

【解説 1】生徒の保護者に対しては、「田中はおりません」ではなく「田中先生はいらっしゃいません」と言うことを支持する人が多いようである。学校では、「ウチ・ソト」の意識よりも、生徒を基準にし、その教師であるという点を優先させる方が良いと考えられる。

【解説 2】同僚を「田中先生」と呼ぶことに抵抗がある場合には、余り一般的ではないが、「田中教諭」などと職名で呼ぶ方法もある。この方がより中立的な言い方になると言えよう。また、「田中先生はおりません」とすれば、田中教諭を余り高めることなく、保護者に対して改まって伝えることもできるだろう。